

## マイ箸、洗い箸・キープ箸

高橋 克法

宝積寺に「こずち」という食事処がある。食事処と書いたが、自分にとっては食事処よりも酒処のほうが正しい。地元産農産物へのこだわりはもちろん、春は山菜、秋はキノコといった旬の食材が、「イマお母さん」の愛情と手間暇をかけられて、素材の持つ最高の旨味を引き出されるまでにお色直しされて出てくる。言うまでもなく、美味しい。東京などから出張してくる町内立地企業の戦士の多くが、帰路必ず「こずち」に立ち寄って、電車の時刻表を気にしながらも暫しの休息を楽しむという。いかにも自分が常連のような書き方をしたが、残念ながら最近では寄る時間がない。町職員からの情報である。

その「こずち」で、洗い箸、キープ箸、マイ箸が始まった。使い捨ての割り箸も置いてあるが、使い回しができる洗い箸も置いておくこともできる。持参したマイ箸を使ってもよい。そうすると、一回につき一ポイントになり、五ポイントで百円のキャッシュバックになる。もともと実際には百円をバックしてもらおう人はほとんどなく、二十五ポイント

を貯めてラーメンを食べるとというのが通の姿であるらしい。取材をした新聞記者の話では、いい歳をしたオヤジ連中がさも楽しそうにキープ箸を使って酒を飲んでいるという。

あれは二年前、一昨年の春だった。町職員組合の執行部と話をしていた。\*執行委員長は環境課の熊田係長。彼は私が「高根沢町土づくりセンター」を中心とする町づくりの講演を頼まれたときに必ず随行する職員である。山梨、神奈川、静岡、埼玉、山形、早稲田大学と県外の講演にもずいぶん行った。今では私の代わりに熊田係長が話をすることもあるが、私より評判がいいという噂もある。彼は課長補佐試験を受ける権利があり、すでに二回受験しているが不合格。能力は十分あるのにどうしてなのか？ ある時彼に訊いたことがある。

「課長補佐になると町長の講演についていけなくなりますが」

なんとまあ涙のこぼれる理由ではないか。私以外、誰も信じない理由とは分かっているもだ。そんな熊田委員長に私はこんなことを提案した。

「熊ちゃん、労働組合がいろんな要求をする立場は分かる。また組合員の親睦もしかり、でもそれだけだったら組合の存在意義はあるんだろうか？ 労働組合運動の原点や歴史を思い出そうよ。町の職員組合がその小さなコップの中の利害だけを追求するのはあまりにも寂しい。熊ちゃんも分かっているように、このまま森を切り続けるとあと五十年で地球から森が消える。世界の人が日本人と同じ生活をしたら、地球の資源は三ヶ月でなくなるというデータもある。まず自分たちでできることをやらないか。ローカルだけれども実は世界に通用するようなグローバルをやらないか。まずはマイ箸、こういうことこそ労働組合の本来やるべきことじゃないか」

熊田委員長は納得したのかしなかったのかは分からないが、その後、組合執行部での協議を経て、平成十七年九月一日、全職員がマイ箸を持つことになったのだった。

箸の材料は九州の南天。熊ちゃんによれば国産材にこだわった結果これに辿り着いたという。ただし白い材なので、カレーうどんや餃子のラー油で色がついてしまうのが難点。

箸箱は京都嵯峨野の竹製。箱だけはセレブである。値段は箸と箸箱セットで千二百円。係長以下の職員組合員は組合費から、課長補佐以上の管理職は管理職員等連絡協議会の会費から支出し、どこにも属さない私は現金で購入したのだった。出前を取る職員が一日平均百人で年間二百日。都合二万膳、重さにして百キログラムの割り箸が使い捨てされていないことになる。そして、な、なんと十七名の町議会議員全員が今年の九月からマイ箸を持つことにもなった。エライ！ お世辞抜きですばらしい。

「使い捨ての箸をマイ箸に変えたからといって何の効果があるの？」

「今さらそんなこと、ていのいいパフォーマンス」

まあいろいろ言われた。確かにマイ箸で地球環境をどこまで改善できるかと問われれば、気の遠くなるような挑戦で「まあその通りですが」と口ごもることもある。でもそれでは楽しくないのだ。行動を起こす動機は素朴で単純で当たり前ではないのか。「木は空気をきれいにしてくれる。木は水を作ってくれる。だからお米や野菜や果物が育つ。そして私たちが生きてゆける」それでい

いし、そこからしか始まらない。「こずち」に集う「いい歳をしたオヤジ連中がさも楽しんで、キープ箸を使って酒を飲んでい」その姿の前には、世の中に必ず存在する否定論者の問いかけなど愚問に過ぎない。否定論者の方々は生きていて楽しくないだろうか。と、勝手に心配してしまうのである。

「ウサギと亀」の寓話、読者の中でこの物語を知らない人は少ないだろう。ウサギと亀が競争をした。だいたいこの設定自体がアンビリーバブルなのだが、劇的な展開を図るためには必要欠くべからざる設定である。結論はご存知のとおり、圧倒的に劣る亀の歩みに安心して、ちよつくら昼寝を決め込んだウサギがレースに負けるという話である。このイソップの寓話は、ウサギの側から言えば「慢心はいけませんぞ」という教訓であり、亀の側からは「たとえ歩みはのろくとも、日々のたゆまぬ積み重ねこそが大切」ということだろうか。

世間の常識を常に疑ってかからねば気が済まないひねくれ者の自分は、そんな教訓では納得しないし面白くない。そしてある時、新たな解釈を自分なりにこじつけた。それは、「ウサギは競争相手の亀を見てレースをした

のだが、亀はゴールだけを見てひたすら歩いた」のである。亀がウサギと自分を比較してしまったら、その走力の差に、最初からレースなど放棄してしまったに違いない。しかし彼は、ウサギがどんなに早くゴールしようとそんなことに関係なく、ただゴールだけを目指したのである。常に他者との比較の中で生きるのではなく、自らの努力と能力、可能性と夢を信じる「亀」。常に世間様の目を意識して、相手の位置や能力から自分の存在を確かめることではない。とりわけて有権者の評判が気になって「票」のことが頭から離れない自分のような人間には至難のことである。一度しかない人生、こんなんでつまらなくはないかと自らに問えば、当然つまらないと答えられない。

ああ、亀になりたい。その達観の境地に到達することは至難の業だが、亀になりたいのである。

熊ちゃんの報告によると、「こずち」では町長用のキープ箸を用意してくれているという（残念ながら熊ちゃんの分はないらしい）。原稿もできまし、久し振りに「こずち」に行くことにする。



高橋克法 Katsunori TAKAHASHI

一九五七年十一月七日、栃木県高根沢町に生まれる。いて座のO型。

大学を卒業後、ジャーナリストを志すが夢破れ、勉強ができて飯が食べられるという理由で国会議員秘書となる。

一九九六年、栃木県議会議員に初当選。

一九九八年八月、現職町長の急逝により町長選に出馬し、

高根沢町長に就任して現在三期目。趣味は炭焼き、栃木県高根沢町在住。

※高根沢町土づくりセンター

平成十二年竣工。畜産（牛）糞尿と一般家庭からの生ゴミ、さらに水分調整剤としてもみ殻を攪拌約五十日間かけて堆肥「たんたんくん」を製造する施設。昨年は年間約千六百トンの堆肥を生産。

現在、堆肥の需要が生産を上回り、常に足りない状況が続いている。